流動性の異なる社会環境での人々の「当たり前」の違い

藤本 昌代
（大学社会学部教授）

「労働の社会学」で扱うトピックス

私の授業では、働く世界で起こっている社会事象を紹介しており、授業では雇用形態、処遇システム、能力開発とキャリア形成、技術革新と働き方の変化、性別職域分離、失業と社会保障など、さまざまなトピックスを扱っている。毎回、授業の終わりに与える課題への考察や今日のトピックスに対する感想を求めると、自分の描いているイメージと実際のデータとの違いに驚いたと書く学生が多い。社会学では人々が「当たり前」だと思っていることを本当にそうかどうか確かめたり、異なる社会との比較によって、その社会での「当たり前」が他の社会では全く「当たり前」ではないといった事を検討したりする。先に挙げたトピックスでも性別職域分離では、男性職（就業者の80％が男性である職業）の多さ、女性職（就業者の80％が女性である職業）の少なさに学生の「もっと世の中は均等」というイメージは崩れる。しかし近年、女性職が減っているというデータを見ると男女の垣根がなくなりつつあるのだと安堵する。ところが管理職における女性の少なさ、あるいは、かつて女性職だった職業に男性の管理職が増えていて、現在は女性職ではなくなった職業のことも紹介すると複雑な思いをする。あるいは失業時の社会保障の国際比較データを検討する時には、日本はあまり手厚くないと心配する学生がいるが、保障が手厚い国は失業者が保障に依存的になることに悩むと聞くと、また考え込む。そしてリーマンショック後の先進諸国の失業率が日本の2倍だと知り、どちらがいい、悪いというより、何によってこのようなことが起こるのかについて彼らはいろいろ考える。授業後に、今日のトピックスについて続きを話すことがよくあると書いてくれる学生や良質の質問や疑問を投げかける学生もあり、私にとって張り合いのある反応をしてくれる学生が多い。

専門性があっても動きにくい社会

学生は就職について大きな不安をもっており、何か専門性を、資格をと言うことが多い。専門職であれば、簡単に転職したり、組織に対して自立的に行動できるのかといえば、東京のように外資系の企業があったり、臨時の仕事がたくさんあるような地域以外では、そんなに容易なことではない。果たして日本の大企業は外部労働市場が一般的な社会のように随時、中途採用を行なったり、社員を解雇したりできるかといえば、どちらも頻繁に行われていることではない（ただし、中小企業は大企業に比べて流動性が高い）。たとえば、全国の移動調査データでは、男性の正規雇用者に限定したデータで転職回数を分析すると、最も転職していないのは、管理職と専門職という結果が出る。事務職、製造職よりも専門職の方が転職する人は少ないのである。日本の場合、大企業はたとえ組織に依存しない知識や技術をもつ専門職であっても2回以上の転職者を嫌う。

その一方で少資源国家である日本は、技術革新を起こしやすくする事を想定し、多様性を高める環境作りのために、若手研究者の流動性を高める政策をとっている。この政策は研究機関には受容可能でも企業の志向と合いにくい部分もある。日本には部分的な流動性が起こっているが、流動性が高まることによる情報流出に対するセキュリティの整備など、まだまだ低流動性を前提とした状況下で組まれているシステムが少なくない。そのため、急激に社会の流動性が高まるということは考えにくい。

高流動性社会の光と影

翻って高流動性地域で有名なシリコンバレーを見てみると、日本にはベンチャー、起業家精神、未公開株の分配など、人々の流動性を後押しするインセンティブや失敗を許容する文化などが華々しく紹介され、2～3回どころかもっと転職する人も多い（ただし、加齢に伴い長期雇用される傾向にある）。この地域にはApple、Yahoo、Google、Facebook、Twitterなど、世界にインパクトを与える企業がひしめきあっており、多くの人々が当地の行動様式や「当たり前」に憧れる。しかし、シリコンバレーでは正社員になっても企業が部署を廃止するといえば、個人を差別したと訴えられないために人々を解雇しやすく、若年層だけでなくベテランも中堅も次年度の雇用に不安をもつ人がいる。シリコンバレーでのITバブル崩壊期やリーマンショック後の失業は非常に深刻で、解雇による受動的転職もこの地域には多く、当地の失業率は今も非常に高い。その一方で大学に入りなおして専門性をつければ、また新たな労働市場に入れる可能性が高まる。人が解雇されるということは、また求人も起こりやすく、リスクと中途採用への寛容さがセットになっている。日本は解雇される心配はアメリカほど高くはないが、大学に入りなおして別の専門性をつけて、再就職というのも容易ではない。

隣の芝生の実際と日本の位置づけ

このような流動性の違う社会で、他職よりも組織に対して自立的と考えられる専門職について比較し、彼らの就業観、キャリアパス、そして流動性の違いによって発達する制度の違いなどを研究するのが現在の私のテーマである。低流動性社会としての日本と高流動性社会としてのシリコンバレーの専門職の比較からは、たとえ職種が変わっても組織の継続性を

重視する社会と、たとえ組織がいくつ変わろうと職業の継続性を重視する社会の「当たり前」や人々に共有されている信念は相当異なるということがわかる。

こんな話を学生にすると、みんなどちらの社会がいいのかわからないが、今まで日本はだめだ、だめだと思ってきたが、隣の芝生が青いだけじゃないことを知り、一生懸命考えている。若いアメリカの人々が世界に社会的インパクトを与える革新を起こす背景には、その社会の規範からの逸脱を許容する寛容さが重要であると言われており、規範にがんじがらめになっているように見える日本にもシリコンバレーのような寛容さをもつことが必要だと言われてきた。しかし、実は日本にも流動性推進政策のずっと前から、人々の流動性と企業を取り巻く社会的環境が相まって革新を実現している産業集積地があることが、京都伏見酒造業の調査からわかった。まるでシリコンバレーのような多様性がありながら、伝統が築かれてきたこの地域は、長期雇用と流動性が混在している社会で、まさしく日本流のひとつのスタイルが形成されていた。

現在は、日本と同様に長期雇用型ではあるが、日本よりも人々が流動しつつあるフランス調査に着手し、日本の相対的な位置づけの理解に取り組んでいる。異なる社会の「当たり前」の違いに面喰いながらも興味深い事象の観察にワクワクしているところである。

（ふじもと　まさよ）

アジアの医療保障制度の強化を願って

内田 康雄
（大学政策学部教授）

はじめに

私は専門分野として、主にアジアの途上国、新興工業国そして日本の医療保障制度の研究をしてきました。実務上は、アジアの様々な国々で（時にはアフリカや中米諸国でも）アジア開発銀行の職員として、あるいは日本政府の援助プロジェクトやWHOの技術援助プロジェクトのメンバーとして長年仕事を行ってきました。

スリランカ、中国での活動

近年は、スリランカの医療保障制度システムの管理運営体制強化のための技術援助プロジェクトに10年ほど取り組んでいます。お陰で、かなりの成果が蓄積されてきており、やっと軍事的には内戦も終結し、来年からは借款資金による大規模案件でスリランカの医療セクターが強化されていきます。私としては、本当に「やっとここまで来た」という感慨をもっています。

また、こうした援助協力の分野以外では、WHOその他の研究資金で医療保障制度の研究に携わることがあります。3年ほど前に、中国の大連で、日本人の私が中国の人たちに対して「香港の医療保障体制とその評価」「台湾の医療保障体制とその評価」について講演をする機会がありました。日本人がこれらのデリケートな問題をもつ地域について話すというので、東北財経大学の会場には大学関係者以外の人、病院の管理者、省や市当局の方々も来てくださいました。そこで、「香港の医療保障体制とその評価」「台湾の医療保障体制とその評価」について統計データを多用しながら、肯定的に話をいたしました。中国の医療保障には様々な深刻な問題がありますが、その一方で香港は英国の植民地で中国人が搾取されてきた地域、あるいは台湾は国民党支配で何かよくない場所などの漠然とした否定的なイメージをもっている人たちが多いなか、私の話はかなりのショック、あるいは反発（？）も呼び起こしたかもしれません。その一方で、中国の社会福祉体制への人々の不満も大変大きく、そうした中、たくさんの質問を受けることができました。中国のかかえる所得格差、社会問題の増大、複雑化のために、中国政府は「調和のとれた社会の実現」ということをいい始めており、そのための一つとして、よりよい医療保険制度の構築ということを実践的な課題として研究しています。しかし、それは容易ならざる困難な事業といえます。そうした背景もあり、香港と台湾の医療保障の進み具合への私の報告は、大連の人にそれなりの驚きをもって受け取られたようでした。

研究成果

このような研究は、私の論文が掲載されている『アジアの医療保障制度』東京大学出版、"Health Care Systems in Asia and Europe" Routledge社で、詳しく論述しています。しかし、医療保障制度は、その国の「国のかたち」「国のあり方」に深く左右されますから、他の国のモデルを学んだからといって、なかなか自国に、たとえ部分的な要素であっても導入するのは容易ではありません。やはり、当該政権の強い決意と人々の医療保障制度強化への熱心な希求と、ある水準の経済発展等が不可欠の要素といえます。

意義深い海外からの研修生／留学生への教育

これまで、20年近く世界各国の保健省、病院、NGOなどの医療関係者に短期の研修、2年間の修士課程、長期の博士論文の指導などを行ってきました。お陰で、多くの教え子が世界各国で活躍をしており、大変うれしく思っています。そのお陰で、今も様々な国々を訪れる機会がありますが、こうした教え子たちが役所などでの面談の労をとってくれたり、夕食会を開いてくれたり、感謝にたえません。教育を通じた関係とは不思議なもので、長年にわたりこうしたよい関係が続き、それがまた新たな関係（新規の援助案件など）へと飛躍するのです。驚くのは、昨年私が体調を崩したとき、そのことを知ったウズベキスタンにいる元教え子（医師）を通じて、モンゴルや中国からお見舞いの電話をもらったことです。本当に涙がでるほど嬉しかったのですが、そこで気がついたことは、これまでの研修、教育を通じて各国の人たち同士の横のネットワークができて、絶えず連絡をとり合っていることです。国際協力は、様々な広がりと深まりをもつものだと実感しています。

沈滞する国内の学びの雰囲気

こうしたよい充実した教育環境と学ぶ熱意と対極にあるのが、残念ながら我が日本の大学（学部教育）の雰囲気だといわざるを得ません。スリランカや他の発展途上国の大学で教えるのは、本当に楽しいものです。大教室の授業であっても、非常に静かで、教える方は集中して論理を組み立て、講義をすることができます。そして、講義中も様々の刺激的な質問を受けます。向学心の高さはすばらしいものがあります。そうした講義を終えると、なにか大きなコンサートでも終えたような充実感を味わえます。また、そうした学生たちの知識のレベルが高いことの一つとして、インターネットを通じてアメリカなどの一流大学（例えばMIT）などの無料配信の講義を頻繁に聴いており、本当に感心させられます。

一方、我が国の学部教育の大教室の雰囲気は悪く、私には一種の学級崩壊かもしれないとも思えます。学業以前の、そもそも「学びの雰囲気」が欠如しています。また、休憩時間の学生食堂などにも、アメリカやインド、韓国の大学にあるように、勉強したり、真剣に議論をしたりする姿はなく、大声で笑いながら何かを話し合っている有様だけが目立ちます。また、学生食堂で何人かがトランプ・ゲームに昼間から興じている姿を見るのは、世界広しといえども日本だけではないでしょうか。

同志社大学総合政策研究科リレーコラム『世界の構造的な変化と「若者」の今後』に詳しく書きましたが、日本の有力企業も、連結グループでの新規採用者のうち75％ほどが、日本人以外の人たちを新入社員としているように、これからの日本企業は以前のようには日本人を必要としなくなってきています。インドの大学で、インターネットを通じてアメリカなどの一流大学（例えばMIT）などの無料配信の講義を聴いている大学生に、すでに日本の学生は相当水をあけられてきており、これからもその差は広がって行くように思われてなりません。この凋落をなんとか食い止めなければなりません。

（うちだ　やすお）

スリランカの病院にて

言語人類学から考える グローバル・コミュニケーション

松木 啓子
（大学グローバル・コミュニケーション学部教授）

グローバル・コミュニケーション学部誕生

２０１１年４月、グローバル・コミュニケーション学部が誕生しました。日本の若者の「内向き志向」が話題にされる今日この頃ですが、当学部の第１期生はそんなステレオタイプを見事に打ち破っているようです。英語コース、中国語コース共に２年次から３年次の海外留学（約１年間）が必修になっていること、日本語コースでは海外からの留学生が学んでいることが主な理由かも知れません。実践的なコミュニケーション能力の育成を目指す学部を敢えて選んだ人達の「ＤＮＡ」も深く関わっているのかも知れません。「外国語」を「自分のことば」として使いこなせるようになり、グローバルな現場で異文化の人達とのコミュニケーションを実践していくためには、そもそも内向き志向ではあり得ません。第１期生の意気込みに大いに期待したいところです。

言語人類学から考える グローバル・コミュニケーション

私の専門は言語人類学です。最近の主な関心は言語イデオロギーの問題です。特定の言語をめぐる体系的価値観がコミュニケーションの問題だけでなく、政治、経済を始めとする様々な社会的、文化的領域に関わってくることに関心を持っています。中でも、近代英語の主要な価値観である指示言語イデオロギーの問題に注目しています。言語学者ロマン・ヤコブソンによれば、コミュニケーションとしての言語には６つの主要な機能があり、指示言語的な機能はそのうちの一つでしかありません。それにも関わらず、特定の一機能のみが前景化されてきた価値観に関心があります。ちなみに、近年、英語はグローバリゼーションとローカリゼーションの問題を考える上で頻繁に論じられてきています。今や「世界英語」（world Englishes）という言葉がある程英語は多様化しつつありますが、言語イデオロギーの視点からこうした問題をみると興味深いです。グローバル・コミュニケーション学部では私の研究や視点を生かしながら、世界で通用するコミュニケーションのプロフェッショナルを育成していきたいと願っています。

言語の「道具説」をめぐって

ところで、「言語は単なる道具、肝心なのは内容、つまり、メッセージ」とよく言われます。本当でしょうか？

メディア論のマーシャル・マクルーハンは「メディアはメッセージ」という有名な発言をしました。メディアはもともと「媒体」という意味ですが、マクルーハンは「メディアはメッセージ」と言うことによって、メディアがメッセージを運ぶ、単なる「媒体」などではなく、メッセージそれ自体を形成する文化的、社会的装置であることを指摘したのでした。私は、言語についても同じことが言えると思います。冒頭の言語の「道具説」はよく繰り返されてきましたが、そこには言語に対する偏った認識（もしくは、言語イデオロギー）があると思います。トンカチやハンマーなどの道具とは違って、言語は無機的なもの、使うためだけのものではあり得ません。このことは、コミュニケーションについて学ぶだけでなく、コミュニケーション能力自体を身につけたいと考えている人達にはよく理解しておいて欲しいと思います。マクルーハン流に「言語はメッセージ」と言ったら行き過ぎかも知れませんが、そこには真実があると思います。

「コミュニケーション能力」再考

文化的、社会的装置としての言語の問題は、言語人類学では１９６０年代からずっと探究されてきました。実は、「コミュニケーション能力」（communicative competence）という言葉はデル・ハイムズという言語人類学者が１９７２年に提唱したものです。ハイムズは、文法的に正しいだけでなく、その場その場で適切に言語が使える能力の文化的、社会的側面に注目しました。当時、ノーム・チョムスキーによる生成文法理論が言語学の主流になりつつある中で、文化や社会から切り離された言語研究と言語観に大きな異議を唱えたのです。ちなみに、私の大学院時代の恩師スーザン・フィリップスは彼の直弟子でした。「コミュニケーション能力」は今や日常語になりつつありますが、もともとはこうした言語学研究の展開を背景にして誕生した言葉だったのです。チョムスキーが論じた人間の生得能力としての「言語能力」（linguistic competence）には文化や社会の要素は入り込む余地はありませんでした。しかし、ハイムズにとって「言語」は文化や社会から切り離してはあり得ないものだったのです。それは常にコミュニケーションとして論じられるべきものであり、特定のコンテクストの中でしか現れないものでした。

グローバル化の中の「文化」とコミュニケーション

20世紀の言語人類学のコミュニケーション研究は常に「文化」を基点にしていました。今でも「文化」は重要な課題ですが、グローバル化の加速する多文化状況の中では、これまでの自律的、自己完結的な文化観では見落としてしまう現象が多く起こっています。例えば、近年の異文化コミュニケーションの研究の中でも、文化的ステレオタイプの問題は頻繁に論じられてきましたが、それでも「文化」は自律的なものとして客体化され、あたかも超時間的に存在するかのように認識されてきたところがあります。文化人類学者リラ・アブ＝ルゴッドが指摘するように、「文化」はもともと混合的、流動的、歴史的なものです。グローバル化の中のコミュニケーションの問題を考える上でも、今後強調していきたいテーマです。

（まつき　けいこ）

User-Friendlyな第二言語学習モデルの構築を目指して

若本 夏美
（女子大学表象文化学部教授）

自転車がメタファー

この4月から自転車通勤を始めた。といっても、自宅のある亀岡市郊外からではなく、JR二条駅から今出川キャンパスまでの片道25分の距離。4月から何か新しいことを、と軽い気持ちでペダルをこぎ始めたのだが、思いのほか、快適である。暑い季節でも苦にならない。運動不足だった頃に比べて重力の影響が減り、視野が狭くなりがちな50代の脳にも木々の緑や京都市内の町屋の風景は柔和な刺激を与えてくれる。特に、帰り道、御所を横切り、釜座通りの並木道を抜け、二条城の周りの自転車専用道を走るとその日の疲れも消え去るようだ。

実践から理論へ

さて、私の専門は応用言語学。現在の研究テーマは、第二言語（英語）学習の個人差を学習者の特徴から解析しながら日本での英語学習モデルを構築することである。もともとのスタートは「英語学習者の達成度になぜ個人差が見られるのか？」という素朴な疑問から。きっかけは第二言語教育研究を本格的に始める前、公立中学校で英語教師をしていた20代に遡る。その頃の私はエネルギーのほとんどを「英語学習につまずいている生徒」の学力向上のために使っていたように思う。その成果か、英語の教え方や授業の構成は、年々うまくなり生徒の目も輝くようになった。しかし、限界を感じ取っていたのも事実だった。それは、教師の立場から考えすぎていたことに原因があるのだが、それに気づくのは大学院で個人差と学習者の特徴について研究を始めてからだった。中でも教室の内外で数多く使われている学習者方略（方法）が鍵だった。例えば、要点をノートに整理する、疑問点を尋ねる、協力をしてグループワークに取り組むなど、多様な方略が使われる。私は、教室内で観察される方略はアクティビティーの鏡写しと思っていたのだが、研究を始めてみて驚いたことは「教えることと学ぶことは必ずしも同じではない」ということだった。学習者は必ずしも教師が教えるように学んでいるわけではなく、方略には個人差があった。これはコロンブスの卵だった。私は教授法といういわば教師側方略にばかり注目をして、学習者が実際に何をしているのか理解する視点も方法も持ち合わせていなかった。学習者自身に注目すること（もちろん大クラスでは困難を伴うが）は新しいタイプの授業とライフテーマとなる研究のスタートであった。研究はその後トロント大での博士論文へ結実することになるが、教師としての経験がなければこのリサーチ・クエスチョンもその後の研究も生まれなかったと思う。

理論から実践へ

そして、現在取り組んでいるのが、方略トレーニングを含めた日本における英語学習モデルを作り上げること。留学することは現在では珍しいことではないが、リンガ・フランカとしての英語を日本国内で習得する方法はある。ただ、そのためには、何をどのように学習するべきかという学習モデルが必要だ。大学生諸姉からも英語学習方法について質問されることが多いが、中高等学校の英語の先生であれば尚更のことだろう。1970年代に始まった第二言語習得における学習者方略の研究。その知見が物語るのは、方略は唯一決定的なものが存在するのではなく、複数のルートが存在すること。ここで重要となるのが、方略使用に影響を与える要因の解析である。学習意欲、言語適性、性別、英語学習への信念、自己効率感など学習者の特徴と方略の関連性が各国で研究されてきているが、私が注目しているのが、学習スタイル、中でも外向性・内向性との関連性である。外向性・内向性の指標は、ユングが提唱し、アイゼンクがその精緻化を図ったが、右利きの人が左利きにならないのと同様、外向性・内向性の基本的資質は変わることはない。しかし、特に英語学習においてはコンテキスト（例えば、先生、学習者の組み合わせ、アクティビティーの種類、教室のレイアウト）によって、影響の度合いが変化するのが興味深い。モデルにおいては方略とスタイルの組み合わせ方と同時に学習環境も重要な要因となる。

ストラテジーイングへ

思えば、日本人にとって英語学習は月と地球のような関係かもしれない。中学高校と6年にもわたり学んできても、なかなか届かない。書店には相変わらず英語学習本といわれるジャンルの本が雨後の竹の子のようにならび、メディアではゴルフ選手を広告塔に聞き流すだけで英語がぺらぺらにという甘いうたい言葉で人を引きつけようとしている。今こそ、英語学習に科学的かつ系統的なモデルが必要である。私は2008年にそのプロトタイプとしてストラテジーイングモデルを発表した。これは決してお金がかかるわけではなく、学習者同士と教員の知恵をうまく結集し、方略を学びの足場とするものである。いかに素晴らしい学習方法であっても、利用するのに飛び切りの能力や努力が必要なものは続かない。私が目指すのは、冒頭で述べたような自転車のイメージだ。誰もがアクセスすることができ、ちょっと利用することで、学習が少し効果的になる。多少の汗をかく必要はあるが、風を切って走るように爽快感を感じることができる。電車や車のような格段の快適さはないが、ガソリンも電気も不要。学習者に優しく、学習者自身に操縦してもらう、そんな英語学習が日本国内で実現できるようにこのモデルのシステムを考えている。心臓部のエンジンは「方略×スタイル×コンテキスト」。このストラテジーイングモデルが誰でも利用できるように、現在バージョンアップを重ねているところだ。毎日、自転車で風を切りながらアイディアをさらに発展させたいと思っている。

（わかもと　なつみ）

自己肯定感と他者理解が培われる学級づくり
～一枚文集の発行を通して～

糸井　文彦
（小学校教諭）

はじめに

毎年4月、始業式を終え新しい教室で新たに集まった子ども達との対面の時。何度体験しても担任教師として心新たにし、気を引き締める瞬間である。子ども達のキラキラと輝く瞳がこれから一年間の学校生活の中で輝きを失わないように、いや、さらに輝けるような教室にしたい。つまり一人ひとりの〝居場所〟があり大切にされる学級づくりを目指している。そのためには、具体的な手立てを持つことが担任教師として大切である。以下にその手立てのひとつである「一枚文集の発行」を柱とした学級づくりについて述べることにする。

Ⅰ．一枚文集発行のねらい

①一枚文集とは

一枚文集とは子ども達が書いた日記や作文などの文章表現を取り上げ、それに教師のコメントを入れ紹介するものである。これを継続的に発行し、学級で読み合うことにより様々な学びを深めていくことが主な実践となる。

②子どもの心を耕す

一枚文集の発行の裏側には日々の継続した日記指導が必要不可欠である。私が一枚文集を発行する意義として第一に考えていることは、子ども達に自分自身の暮らしをじっくりと見つめる〝目〟を養いたいということである。普段の何気ない暮らしの中にも、子ども達が心を揺さぶられるような出来事や体験が溢れている。子ども達が〝目〟で〝耳〟で、つまり五感を存分に働かせ、その体験や思いを言葉にして表現する。この繰り返しが子ども達の心を耕すのである。

③自己肯定感と存在価値

子ども達は皆、〝認められたい〟という欲求を持っている。殊に身近な大人である親や教師、そして、友達からである。学校は一日の多くの時間を過ごす場である。その中で自分自身の存在価値を感じることができる。つまり、他から認められていると認識できることが重要である。私は基本的に一日に一人か二人の作品を読み合い、そこから生まれる〝共感〟を大切にしている。そのことが、ひいては自己肯定感へと繋がるのではないだろうか。

④相互理解する学級風土

一枚文集の発行は学級全体の成長を促す。一人の子どもの生活経験から生まれた作品を読み合うとき、子ども達は、その文章表現から場面の様子や気持ちを想像する。また、自分の体験と重ね合わせたり、新たな発見をしたりする。そこから学級全体の学びへと波及していくのである。この活動を継続することは、互いの暮らしや思いを知ること、そして、友達のよさを見つけ、認め合い、相互理解する学級風土を作るのに効果的である。

この相互理解は子ども達だけにとどまらず、一枚文集を保護者が読むことは子ども達と親とのコミュニケーションの〝橋渡し〟となる。保護者が継続的に一枚文集を読むうちに、我が子が生活している学級の友達を知り、学級の子ども達をみんなで支援していくという意識付けになる。一枚文集の発行を学級づくりの柱に据え置くということは、教師と子ども、子どもと子ども、子どもと親、学級の子ども達と学級の保護者という様々な相互理解の構築に大きく寄与する。

Ⅱ．指導法の実際

前述の通り、一枚文集発行のための重要な実践として日々の日記指導がある。子ども達が書く日記には、必ず赤ペン（教師のコメント）を入れて返却することが大切であり、この赤ペンの入れ方が、一枚文集を柱とする学級づくりの成否を担っている。私が最も大切にしていることは、子どもの思いを肯定的に捉え、受け止めることである。子どもにとって嬉しいことは一緒に喜び、悲しいことは一緒に悲しむこと。つまり、いかに子どもの気持ちに寄り添い、共感するかということである。また、赤ペンの中に子どもの名前を入れて書くことや、子どもの表現をそのまま復唱して書くことで、子どもにとっては「先生は、僕（私）を見てくれている」という意識に繋がり、子どもに、「また、書きたい」（意欲）や「先生は分かってくれる」（安心感）「書いてよかった」（満足感）などの気持ちを持たせたい。これらの日々の実践から考えると一枚文集として発行するのはほんの一握りである。そういった意味ではこの日記指導こそが子ども理解、信頼関係の構築を目指す学級づくりの根幹とも言えるだろう。

Ⅲ．一枚文集によって変わる子ども達

最後に、この実践を十数年続けた中で経験した子ども達の変容について触れたい。低学年、特に一年生では子ども達の話し言葉をキャッチし、それを口頭作文という形で一枚文集を始めた。子ども達は文字を学習していく中で多くの言葉、文章表現を獲得していく。継続した取り組みの中で、自分の思いを表現できるようになり、それを互いが認め合うことで学級のまとまりが作り上げられた。年度末には、保護者からも子どもの成長を喜ぶ声を頂き、教師として達成感を得られる経験ができた。高学年では年度初めの学級としてまとまりのない状態から、一枚文集を継続することで、子ども達が安心して何でも言い合い、聞き合える雰囲気ができた。様々な授業の中でも自分が疑問に思うことや考えたことなどを進んで発表し、尊重し合える学級づくりができたことは担任として大きな財産となった。

しかし、大切なことは、ただ一枚文集の実践をすれば学級づくりがうまくいくというわけではない。私は教師として一人ひとりの子どもをいつも温かく見つめ、寄り添う姿勢を持つという信念を持って実践を続けている。

おわりに

小論では「一枚文集の発行」を柱とした学級づくりについて述べてみた。数年来の取り組みの中で、一年間継続しての実践により、一人ひとりの子どもの変容や学級の成長など一定の成果が見られると自負するところはある。しかし、学級づくりの方法に完成形はないであろうし、今後、各学年の発達段階に応じた系統だった指導方法や別の切り口によるアプローチなどを研究し更に研鑽を重ねていく所存である。

（いとい　ふみひこ）

「わたしたち」の授業
UOI（Unit of inquiry／探究の単元）

—PYP（IBO Primary Years Programme／国際バカロレア機構 初等課程プログラム）スクールの一員となることを目指して

杉山 元洋
（国際学院教諭）

はじめに

4月に開校して後、6週間を単位とする初めてのUOI（Unit of inquiry／探究の単元）を5月末に終えました。本稿では、児童による探究型学習の実現を目指しての週8時間のUOIについて、単元の協同計画やリフレクションに使っている“PYP Planner”という指導計画書兼報告書のような書類の項目を使って、1年生の単元を紹介します。

1. What is our purpose? 目標は何か?

この単元は、PYPで毎年取り組むように設定されている教科横断テーマの1つ“Where we are in place and time”の下、「学校には、それぞれわたしたちの学校生活を豊かにする機能と役目を持った場所があり、その場所を支えている役割をもった人がいる」というセントラルアイディア（以降“CI”と略）の理解を目指して行われました。この目標は、小学校学習指導要領の生活科から、学んでほしい大切な概念を取り出し、他の文脈にも転移可能な考え（big idea）として作られています。

2. What do we want to learn? 何を学びたいのか（学習内容）

探究型学習の内容は、概念（concept）によって示され、その概念を通して学ぶことが目指されます。この単元では、PYPの8つのキーコンセプトの中から、前述のCIとの関わりによってform／形態、function／機能の2つを選びました。また、この2つに対応するものとして部屋の目的、設備、役割の3つを関連する概念としました。

ここから「各場所の名前と目的」、「設備や道具」、「そこを支えている人の仕事」という3つをこの単元の学習の範囲として、実際の授業を導く問いとして次の問いを使いました。

「学校にはどんな場所や部屋があるかな?」

「それらは何のために作られたのかな?」

「そのためにどんな設備があるのかな?」

「どんな人たちがいる?私たちの学びをどう支えてくれている?」

3. How might we know what we have learned? 学びをどう確かめるか?

4. How best might we learn? どうしたらよく学べるか?（児童や教師が作り出す探究アクティヴィティ）

探究型学習では、常に今の児童の知識やスキルから始めます。この単元では、①幼稚園等にはどんな場所やものがあったのを思い起こし、今自分がいるDIAと比べること、②どうしてあるものが違うのかを考えることから始めました。幼稚園とDIAにあるものを付箋に書き出して、どちらかにしかないもの、両方にあるものに分けることは概ねできていましたが、遊びを通しての様々な活動を行う幼稚園、読み書きなどの学習を中心とした活動を行う学校という目的から設備を捉えることはほとんど誰もできていませんでした。また、DIAではどのようなことをしてみたいか、できそうかという問いに対しては、既に多くの児童が学校の部屋や設備でしてみたいことを書いていましたが、遊びや運動などが多く、読み書きの学習について言及した児童は半分以下でした。

ここを出発点として次の学習経験を設定しました。

①学校を構成する人、場所、目的の基本的知識の獲得と確認

- 同じクラスの友だちと自己紹介をし合って、相手の名前を聞いたままに書き、互いにチェックし合う
- 学校を全員で歩いて回り、それぞれの部屋の名前を聞いたままに書き取る
- 本校の児童の目指す理想の姿が表されている校歌を毎日歌い、清書する
- 学校を全員で歩いて回り、出会った教職員に代表が自己紹介をした後に名前を尋ねて、それを全員が聞いたままに書き取る

②部屋の目的と設備の調査と整理

きずなホール（沢山の人が集まる、宿泊に利用できる）、チャペル（礼拝と劇場）がなんのためにあるのか、部屋の目的やその設備について関係者の説明を聞き、質問（「これは何?」が圧倒的に多かった）をしました。

- 各部屋の最も大切な2つの目的のために置かれている設備や道具を探し、教員に報告してリスト形式で記録した。当初は、目的とは関係ない設備を報告したり、どうして必要なのか説明できなかったりという場合があったが、二人で相談をしながら考えて探すようになっていった
- 記録した部屋の設備がもしなかったとしたら、どうして困るのかを書くことで、その設備が果たしている役割（function）をより意識して考え、図や絵を使って記録した
- それぞれの設備の形態／form（色、形、大きさ、硬さ、数）に着目して調べて表にして記録した（大きさや数につい

六つの教科横断テーマの各学年のセントラルアイディア（2011年6月26日現在）

	Who we are	Where we are in place and time	How we express ourselves	How the world works	How we organize ourselves	Sharing the planet
1年生	家族の中の自分の役割は成長と共に変わってきた。	学校には、それぞれ機能と役目を持った場所があり、その場所を支えている役割をもった人がいる。	私たちは物語やエピソードを通してメッセージ（大切なこと）を学んだり、伝えたり、残すことができる。	植物はつねに周りの環境とのやりとりを通して生命を維持・活動している。	自然（地球）のさまざまな場所をすみか（住環境habitat）として生き物は共有している。	公共の場所の利用においては、そこを支える人々や他の利用者の視点と自分の行為の影響を考慮した行動が求められる。
2年生	社会の一員として自立するには、期待される役割と責任があることに気づき、積極的に周りの人々と関わり、社会活動に参加する必要がある。	町は生活上の必要性に応じた役割を担う構造をもっている。	私たちはさまざまな媒体を通して思いや考えを表し、伝え、共有することができる。	物は押したり、引いたりする力を受けて動く。	私たちは自然の変化を予測し、利用することで自らの生活を豊かにしている。	自然という住環境を共有する一員として、人間には他の生き物への配慮が求められている。
3年生	私たちの道具は、生活の必要性や困難に答えるべく、先人の工夫や努力によって変わってきた。	私たちは昔から太陽からの様々な恩恵を受け、それを活かして暮らしている。	私たちはことばに決まり事を持たせ、それに自分のことばを一致（逸脱）させることで、よりよく自分を表現し、相手に効果的に伝えることができる。	生き物には環境に適した固有の姿、つくり、育ち方がある。	人々は、様々な工夫をしてモノ（商品）を流通させ生活を支え合って生きている。	人間は環境に対して、良い影響も悪い影響を与えうる存在であり、それがゆえに環境に対する責任を持っている。

ては算数との統合）

・全クラスを対象とした司書教諭による図書館利用のオリエンテーションの中で、その使用目的（例：本を借りる、返す等）をマインドマップの形で記録し、さらにその使用目的に対応するように図書館の仕事の説明を聞いて、記録した

図書館の利用目的と対応する仕事

③保護者を案内して説明する

授業参観の際に、今回調べた部屋の設備の場所と目的に関して自分の保護者からの問いかけを受けて、児童が案内して説明する機会を持ちました。児童は自信を持って説明を行い、保護者アンケートでも、詳しい説明にびっくりした等好意的な評価をいただきました。

④他の文脈への応用

学校から家に視点を移し、家にある部屋（台所、お風呂等）の目的に合ったあるものを調べてくること、それがなかったらどうして困るかを調べてくることを宿題として行いました。一つの部屋でも複数の目的があり、それぞれに応じた設備をリストアップできていました。

5. To what extent did we achieve our purpose? どの程度まで目的を達成できただろうか

単元の始めに尋ねた質問を再度しました。「幼稚園とDIAでは、どうしてあるものが違うのか」という問いに対して、1回目は学習という目的または通う子供の違いに触れたものは29名中4名でしたが、2回目は、14名に増えました。また、「学校ではどんなことができそうか、したいか？」に対しては、半分の児童の回答で設備が増えて、全体的に具体的になりました。また、他の友だちや教員など学校を構成する他の人たちについての言及がありました。

6. What student-initiated inquiries arose from the learning? この学習から、どのような探究を児童が起こしたか

探究型学習における評価では、その学習の結果として児童に起こる、また、児童が対外的に行動を取り、起こそうとする変化を重視しています。では、この単元を通して児童にどんな変化が教員の眼に映ったかを次に挙げます。

・「これは何？」だけでなく「何のためにある？」といった質問をする児童が増えた。

（例）「天井のぶつぶつはなぜついているのか？」（天井の吸音用の穴を見て）

・単元が終わっても、「なぜあれがあるの？」と尋ねるようになった。

・学校を探検するようになった。

・「もっと調べたかったよ！」との声があった。

終わりに

この実践は、私たちが目指しているものからは程遠いと言わざるをえません。克服すべき課題を最後に挙げます。

・他の教科との更なる統合、連携の推進

・知識、スキル、態度、ＩＢを学ぶ人の学習者像のより明示的な育成

・1クラス30人という人数でどう探究型学習を効果的に行えるか

課題は他にもありますが、それでも貴重な一歩を踏み出したばかりであり、皆で一つずつ乗り越えていきたいと願っています。

（すぎやま　もとひろ）